

フレンドリーな僧侶良寛

良寛（1758-1831）は、典型的な禅宗の僧侶とはかけ離れた生活を送っていました。彼の本と手紙、彼を知っていた人々の話、そして彼が住んでいた場所で受け継がれてきた逸話から、彼は決して寺院の僧侶としての地位を果たすことはなく、代わりに質素で、時には遊牧民のライフスタイルを好みました。彼の放浪の中で、彼の詩、書道、そして変わっているが人懐っこい性格で知られるようになりました。これらの資質は、彼が他の人に愛され、彼の名声を大きくしたことに貢献し、それは今でも生き続けています。

良寛は、越後国（現在の新潟県）出雲崎で山本栄蔵として生まれました。出雲崎は佐渡島で採掘された金銀の水揚げ港でした。北国街道の宿場町としても賑わっていました。良寛の父は村長で僧侶であり、裕福な家庭でした。良寛は長男でしたが、幼い頃から「お坊さんになりたい」と思い、近くの光照寺に居を構えました。

出家の際に良寛大愚と名がつき、「心広く寛大で愚かな人」と訳されます。しばらくして、国仙という禅師が光照寺を訪ねてきました。これが良寛の人生の大きな転機となりました。

若いお坊さんは、国仙の教えに感銘を受け、弟子になりたいと願いました。国仙はこれに同意し、二人はすぐに彼の故郷である玉島（現在の岡山県倉敷市の一部）にある円通寺に戻りました。そこで良寛は、朝 3 時に起きてお経を唱え、料理や掃除をして、托鉢に出かけるという修行をしていました。

良寛が寺の修行を終えた翌年に国仙が亡くなり、良寛は型破りな道を選んだ。円通寺を出て日本中を巡礼し、他のお寺から学びながら、貧しい人々の視点を得る方法として物乞いをしました。これは悟りを開いた後の訓練の一環でした。彼は施しを受けることを恥とは思わず、何年もの間、周囲の人々の優しさだけで生活をしていました。

日本以外では、良寛は詩や書道で最もよく知られていると思いますが、彼は自分の作品を厳選していて、自分の書いたものを誰にも売ろうとはしませんでした。代わりに、彼は貧しい人々がそれを要求した場合、または彼を助けた人々のために、個人的な感謝の気持ちとして執筆しました。

やがて良寛は故郷の越後に戻り、ミニマリストのライフスタイルを続けました。寺泊のエリアでは、小屋で生活し、照明寺でも生活していました。彼の自然への愛は、子供たちへの愛情や貧しい人々への思いやりと同様に、多くの著作に反映されています。

良寛も和島村（現在は寺泊とともに長岡市に合併）を中心に多くの交友関係を持ち、そこで彼が後に住むようになりました。その中でも最も有名なのは、晩年の良寛の世話をしてくれた若い尼僧、貞心（1798-1872）との友情ではないでしょうか。出会った時の良寛は 68 歳で健康状態が衰えていました。年の差や社会的地位の違いにもかかわらず、二人は深い絆で結ばれていました。頻繁に俳句を交わしていましたが、このような優しい歌には、良寛のユーモアがよく表れています。

良寛の晩年の側近には、商人の木村元右衛門（1778～1848）がいます。元右衛門は良寛を家に招き、滞在中に良寛が貞心と出会います。貞心によると、良寛の死に際は、まるで眠りについたかのように瞑想の姿勢をとっていたと言われています。

和島にある「良寛の里美術館」には、良寛の手書きの詩や書の一部が展示されています。彼が訪れ

た場所、彼を知る人々、彼が残した作品など、彼の人生をより詳しく知ることができます。彼がよく通っていた地元のスポットの多くは、近くのはちすば通りにあります。隆泉寺には、元右衛門の家や、良寛が子供たちと遊んでいた神社などがあり、彼のお墓があります。

現代人は、長岡の地で彼の著作を目の当たりにし、その足跡をたどることで、彼がいかに愛された人物であったかを知ることができます。彼が亡くなってから 2 世紀後、友好的な僧侶の遺産は受け継がれています。